月刊

こころのとも

第十巻
一月号

鏡を見る

鏡は自分の姿を
写してみるもの

なのに
鏡を見る人ほど
自己への執着が
強い

それは
こころの鏡を
見ないということ

自己を写す
他己が欠けている
ということ
自己と他己の
統合ができないか
ということ

仏縁の発生・消滅

仏縁は
信じることで
発生し
信じなくなることで
消滅する

人生を考え直して みたい人は（六〇）

―『正法眼蔵』解説（四）―

現成公案を続けます。

迷を大悟するは諸仏なり、悟に大迷なるは衆生なり。さらに悟上に得悟する漢あり、迷中又迷（ゆうめい）の漢あり。

玉城康四郎氏の現代語訳は次の通りです。

迷を大悟するのが諸仏であり、悟りのなかにありながら迷っているのが衆生である。さらに、悟ったうえにも悟り抜いていく人もあり、迷いのなかに迷いを重ねていく人もある。

私たち人間は、生まれたときは皆、自分に宿した如来さま（悟り）と生きようとする煩悩（迷い）とが、未分化ですが統合されています。皆さんも、考えてみればすぐお分かりだと思いますが、赤ん坊は「あるがままにある」だけだと言えます。多くの聖者が指摘しますように、それは、いわば悟りの境地と同様なのです。

その赤ん坊のこころの状態ですが、生きようとする力（煩悩）は、母のお乳を吸おうとし、それが満たされないときや、気持ちが悪いときや、怖いときは、泣き叫ぶ行動となって表出されます。また、他者を求める如来さまのこころは、人に対する「無条件な関心」として現れます。多くの人は気付いていませんが、赤ん坊は、人の発する声や、顔の表情に極めて敏感に反応しているのです。繰り返しますが、それは、どこまでも無条件な関心なのです。善い人だからとか、自分に利益をもたらす人だからとか、好きな人だからといった条件を付けません。誰に対しても同等に関心を示すのです。

ところが、人が成長するに伴って自分でできることが、多くなってくるにしたがって、だんだんと生きようとする力・煩悩が大きくなってきます。それにつれて、煩悩から如来さまが分化し、それが相対的に小さくなってしまうのです。別のたとえで言いますと、煩悩の垢によって如来さまの働きがおおわれてくると言えます。

そうなりますと、無条件な関心ではなく、条件がついてしまいます。自分に都合のよい人だけに関心を払うようになってくるのです。それがこうじてきますと、相手のことを配慮しないで、自分の思いだけで行動するようになってしまうのです。そうなりますと、自分を社会に

定位することが不可能となります。人間にとって社会に定位できないことは、とても不安なことなのです。その不安をまぎらわすものは、「自己」の情動（欲望・情緒・気分など）の追求なのです。こうした状況が、迷いの極致にあると言えるのです。

でも、仏をめざす人は、そうした迷いを自分の苦しみとして受け取ります。そして、それを克服することを求めます。

本文の「迷を大悟するは諸仏なり」とは、こうした状況をさしています。迷い（煩悩）があるからこそ、大悟することができるのです。逆に言いますと、もともと自分の中に如来さまを宿しているからこそ、迷いを克服しようとして修行するとき、大悟することができると言えるのです。

では、次の「悟に大迷なるは衆生なり」は、どういうことなのでしょうか。

先程の私の理論で言いますと、人間は生まれながらにして如来さまを自分の中に宿しています。ですから、誰でもが悟りを得る可能性があるわけです。ただ修行しないだけなのです。このことを「悟に大迷なる」と言っているのです。修行すれば悟る可能性があるのに、煩悩に迷っているのが衆生、つまり普通一般の人であるということです。

このように、迷いと悟りとは、一枚の紙の裏と表のような関係にあります。私の理論ですと、迷いの元は、「自己」の無意識（意識下・潜在意識）に宿す「生きる力＝煩悩識」であり、悟りの元は、「他己」のそこに宿す「他者を求め、愛する力＝如来蔵識」で、それらは難しく言いますと、自己と他己という弁証法的運動のモーメント（契機）をなしているのです。それをたとえれば、紙の裏と表ということになるのです。

仏と成る人は、迷いの故に苦しみ、それを克服しようとして修行します。そこに悟りが待ち受けているのです。ところが、衆生にとどまる人は、悟りを得る可能性をもっているのに、修行もせず、ますます迷いの元である煩悩に執らわれて、迷いを深めていきます。現代人の多くは、煩悩（つまり迷い）を克服するどころか、それを追求することを生き甲斐としています。それが、次に出てくる「迷中又迷の漢あり」といわれる状況なのです。

しかし、悟りを得た人は、その自内証（自分の中の悟りの体験）を、さまざまな生活・体験場面で、確かめることによって、ますます、人生に対する洞察を深めていくことができるのです。それが「さらに悟上に得悟する漢あり」ということなのです。

自作詩短歌等選

歴史の意味

歴史とは
古きを温（たず）ねて
新しきを知る
ということ

それは
現在における
過去と未来の
統合

民主主義は
その過去を
なくする制度
いま
歴史が意味を
もたなくなっている

こころの末法

末法と
思いて石に
経典を
彫って残して
みたけれど
こころの末法
救うよしなし

個性とは

個性とは
個の主張
他から異なることの主張

真の自己に達するとき
そんなものはいらない
ただあるだけ
他から見て
どれほど個性的で
あろうとも
ただあるだけ

個性的と見えるのは
見る人の執らわれの
反映に過ぎない

畏敬・尊敬の喪失

いま
人々から
未知なものへの
畏敬の念が
消えた

その結果
子どもたちの
親や教師への
尊敬の念が
失われた

それは
教わる者の
謙虚さの
喪失となって
現れている

不向きな教師

現職の
再教育を
してみたら
教師の中に
教師には
不向きな人の
なんと多きよ

執らわれに合う

執らわれに
合わせてくれる
人ならば
こんなよい人
ないけれど
ひとたび合わぬ
ことあれば
これぞ極悪
非道人だと

大学駅伝

正月休みは
大学駅伝

限りなく
日本的な行事
仲間のために
死に物狂いで
走る

分かっていない自分

自分では
知っているつもり
でも
ほんとうは
分かっていない

自分のこと

他人のせい

いらだつのは
人のせい
むかつくのも
きれるのも
みんなみんな
他人のせい

反省・内省ができない

反省も
内省も
できない子の
何と
多くなったことよ

権威を失うとは

いかなる権威も
否定すべし
とする思想がある

権威は
他己に属するもの
その根源は
如来さま

いま
日本人は
権威を失い
こころを失い
たましいを失い
信（信仰）を失って
根無し草に
なっている

自作随筆選

文殊の智慧

新年に、講読新聞を毎日から朝日に変えました。一昨年は、朝日でしたが、昨年始から毎日にしました。ところが、その後、朝日が勧誘に来て断りきれず、今年一年は、また朝日にすることにしました。どちらにしても、私には、新聞から「教わる」ことは、皆無なのですが、好みとしては毎日が好きです。それは、毎日が教育を重視していること、泥臭さはあっても、生活が滲み出るようなところがあって、人々の生活の実態が感じられるように思うからです。こうした背景があって、このところ特に、朝日の社説を毎日、気を入れて読んでいます。

一月四日の社説の見出しは、「文殊の知恵を紡ぎ出す―やわらかな社会をつくる―」でした。この社説を読んで、呆れてしまいました。朝日を講読の方は気を悪くなさるかも知れませんが、こんな大新聞がこの程度だから、社会はますます悪くなると思えてしまいました。

問題と思えます社説の最後の段落は次のような見出しと、内容になっています。少し長くなりますが、引用してみます。

みんなが発信源になる

情報の自由な交流は、半面、予想もしない副作用ももたらす。年末に起きた毒物の宅配事件などはその最たる例だ。こうした悪用を厳しく排する一方で、自由な交流を促すような仕組みを考えたい。

一人ひとりの意識も問い直される。役所や企業、業界団体といったこれまでの「権威」に寄りかかっていては、社会は前に進めない。互いに声をあげ、行動を起こすことで問題の解決に挑む。それぞれが主役、発信源になることが求められている。

「大伽藍ではなくバザール」。ＬＩＮＵＸに携わる人々が口にするたとえ話だ。一人の名人による壮大な作品に負けないものを多くの人々が集う騒々しい市場で作れるという心意気である。

八方ふさがりに見えるこの国に、文殊の知恵を紡ぎ出すバザールをつくりたい。

皆さんは、これを読まれて、どんな印象を持たれたでしょうか。私は、これぞ、終末を迎えつつある現形態の民主主義の亡霊をみる思いがします。

なぜ、そうなのか、すこし解説しておきます。

まず、出だしの「情報の自由な交流」ですが、実は、

「情報を自由に交流する」ほど、人間はますます孤立し、社会は崩壊に向かって行くのです。

情報は、私のモデルでは、知的な働き（認知―言語機能）に属します。ですから、そんなものを、客観的な通信媒体を通じて、どんなに多く取り交わしても、こころの働き（情動―感情機能）である、人の人に対する優しさや、人を思いやるこころを養うことはできないのです。いま現代社会が最も問われているのは、こうした、ここころの働きとしての「他者性」です。直接（一次的）にではなく、人から離れて（二次的に）、情報を自由に交流することは、これに逆行します。それは、ますます、他者性を失わせることになって行くのです。つまり、現在そうなっていますが、それが、ますます、エゴ追求の手段となり、エゴ社会を拡大させるものになってしまうのです。逆説的ですが、インターネットや伝言ダイヤルの流行は、こうした傾向の現れと言えるのです。

次に、「これまでの『権威』に寄りかかっていては、社会は前に進めない。・・・それぞれが主役、発信源になることが求められている。」という部分ですが、これぞまさに、現行民主主義の弊害をもたらす元凶なのです。

今の民主主義では、一人ひとりが価値判断基準をもち、それをお互いが議論することで、お互いの意志が尊重された、正しい判断に到達することができる、と考えられています。そこでは、「これまでの権威」ではなく、どこまでも現在の一人ひとりの判断が尊重されるのです。

しかし、それは、伝統や慣習・風習や、それらが作りだしてきた規範、あるいは「聖人の教え」の軽視を生み出します。私は、凡夫（仏教では普通の人をそう呼ぶ）が何千億人寄りあつまろうと、たった一人の聖人には及ばないと考えています。ゼロをいくら足しても一にはならないようなものです。そういう、凡夫が到達できない、過去の聖人の教え（＝人々の光・灯台）に価値判断の基準を求めるべきなのです。ゼロの凡夫の議論など、悪の集積をもたらす以外の、何ものでもないのです。

このことが、最後の「一人の名人による壮大な作品に負けないものを多くの人々が集う騒々しい市場で作れるという心意気である。・・・文殊の知恵を紡ぎ出すバザールをつくりたい。」という部分に現れています。

どんなに多くの凡夫が、騒々しく寄り集まって議論し、競おうとも、文殊の知恵に至ることは決してありません。それは、人けのないところで、一人静かに達する境地なのです。そのことを理解しないところに、現形態民主主義の最大の欠点があるのです。

社説は、正に社会を崩壊させる方向にあると言えます。

釈尊のことば（七六）

―法句経解説―

うっかり、二つとばしていましたので、それをやって次に進みます。

（二六〇）頭髪が白くなったからとて（長老）なのではない。ただ年をとっただけならば「空しく老いぼれた人」と言われる。

（二六一）誠あり、徳あり、慈しみがあって、傷（そこな）わず、つつしみあり、みずからととのえ、汚れを除き、気をつけている人こそ「長老」と呼ばれる。

中国の儒教の教えには、長幼の序というのがあります。無条件に年長者を敬うべき、という教えです。宴会での席には上下があって、社会的地位や年齢によって、それが決まります。この教えの基礎には、私の理論で言いますと「自己」よりも「他己」を重視する思想があるのです。それは、秩序や規範の尊重であり、人の心を感じるこころの重視です。あるいは、時間論で言いますと、未来よりも過去を重視します。過ぎ去ったものを大切にする思想です。ですから、老人は尊重されなければなりませんし、子にとって親はなによりも大切にすべきものとなります。（また、秩序を背負った権威には従順に従わなければなりません。）

すこし余談になるかもしれませんが、時間的な経過を大切にするこうした思想のもとでは、人間は生きた時間の長さが大切になります。ここに、中国に不老長寿をめざす仙道の思想が生まれた理由があると思います。

でも、現在の日本にはかつてあった儒教の教えは、まったく廃れて、「他己」よりも「自己」を重視する欧米の近代的合理主義と個人主義が入ってきました。

それは、当然に過去よりも未来を重視する思想なのです。そこでは、生きてきた時間の長さは殆ど意味を持ちません。未来に向かって新たに何ができるかが問われるのです。冒険（ベンチャー）や挑戦が求められます。

そういう社会では、老人は大した役割を持ちえません。どうしても社会の片隅に追いやられていきます。もし、老人が重要な役割をもつようだと、そういう組織なり団体なりは、やがて現代の社会からは淘汰されていくことになるのです。

こうした、自己や未来を重視する社会では、たとえ、この（二六一）の偈にありますように、真に長老と呼べるような、「誠あり、徳あり、慈しみがあって、傷わず、

つつみあり、みずからととのえ、汚れを除き、気をつけている人」であっても、老人は疎んじられることになるのです。

私は、ただ年齢を重ねたというだけで、あらゆる人を尊重すべきだとは、思いません。この（二六〇）の偈にありますように、ただ「頭髪が白くなった」り「年をとっただけならば」、それは「空しく老いぼれた人」ということになると思います。

現代の自己社会にあって、老人自身も「空しく老いぼれる」ことに、唯々諾々としているように思えます。殆どの人は、「誠あり、徳あり、慈しみがあって、傷わず、つつみあり、みずからととのえ、汚れを除き、気をつけている人」になろうとはしていないように思えるのです。社会全体が堕落してきている一つの現れのように思えます。

これから、日本は世界一の長寿・老人大国になろうとしています。そうした多くの老人が、若者の納める年金にすがって、養われるだけの人間になることは、私は、厳に戒めなければならないと思うのです。

偈にありますように「誠あり、徳あり、慈しみがあって、傷わず、つつみあり、みずからととのえ、汚れを除き、気をつけている人」になって、若い人に安らぎを与える。そうすることによって、精神文化の高揚に貢献すべきだと思うのです。ですから、この偈は、現在の日本の老人に向けて、まさにうってつけのものと言えるのです。

（二六四）頭を剃ったからとて、いましめをまもらず、偽りを語る人は、（道の人）ではない。欲望と貪（むさぼ）りにみちている人が、どうして（道の人）であろうか？

（二六五）大きかろうとも小さかろうとも悪をすべてとどめた人は、もろもろの悪を静め滅ぼしたのであるから、（道の人）と呼ばれる。

「いましめ」とは戒律のことです。仏教には十善戒というのがあります。それは、①不殺生、②不偸盗、③不邪淫、④不妄語、⑤不綺語、⑥不悪口、⑦不両舌、⑧不慳貪、⑨不瞋恚、⑩不邪見、の十個です。なお、僧侶が守るべき戒律はこの他にも何百とあります。

この（二六四）の偈に出てきます「いましみをまもらず」というのは、こうした全ての戒律を守らないことが含まれます。ですから、次に出てくる「偽りを語る」のは、④不妄語戒に反しますし、「欲望と貪りにみちてい

る」のは⑧不慳貪戒に反しています。

仏教が、修行生活で大切にするものに、戒律を守ること（過去の諸仏の教えに従うこと）、禅定（ヨーガ・瞑想）をすること、知恵を得ること（過去の諸仏の教えを学ぶこと）の三つがあります。そして、こうした生活をしていれば、やがて、解脱が起こり、その解脱とはどういうことなのかが、また生活の中で確認していけると考えられています。密教ではこれを、「戒、定、慧、解脱、解脱知見」と言っています。

偈に出てくる、「道の人」とは、こうした「戒、定、慧」の生活を守っている人のことを言います。なお、道の人の原語（サンスクリット）を中国語に音写したものを沙門と言っています。

現代では、一般民衆は言うに及ばず、僧侶さえも「戒、定、慧」を守らなくなってしまっています。末法を通り過ぎて、滅法・無法の時代になっている、と言ってもよいと思います。

（二六五）の偈にありますように、「悪をすべてとどめた人」、つまり悪を為さないでおれる人とは、先程の十善戒で言いますと、それがすべて守れる人、ということになります。

この十善戒は、不邪見戒を除けば、直接的に他者に関わることです。つまり、悪とか善とかは、他者との関係で決まることだと言えます。自分では善いことであっても相手が悪いことだと思えば、悪いことだということになります。それは、自分に執らわれれば、悪が善と思えてしまうということです。

本当は、善であるものは、十善戒にあるように立場や時代によって揺らぐことのないものです。しかし、それが、自己に執らわれるとき、揺らいでくるのです。アメリカの日本への原爆投下がアメリカにとっては善であっても、日本にとっては悪、否、人類にとって悪であると言える、ようにです。アメリカが自国の利益に執らわれるとき、それが分からなくなってくるのです。現行の民主主義では、多数が善とすることが善であり、多数が悪とすることが悪であるのです。それは、相対的にその時、その時、その判断をする人の構成によって、変わってきます。あらゆる価値が相対化してしまうのです。ここに民主主義の大きな一つの欠点があります。

ですから、現代では「悪をすべてとどめ」たり、「もろもろの悪を静め滅ぼす」というようなことは、何が悪なのか定義が困難ですから、どだい意味をなさないということになってしまいます。

（二六六）他人に食を乞うからとて、それだけでは（托鉢僧）なのではない。汚（けが）らわしい行ないをしているならば、それでは（托鉢僧）ではない。

（二六七）この世の福楽も罪悪も捨て去って、清らかな行ないを修め、よく思慮して世に処しているならば、かれこそ（托鉢僧）と呼ばれる。

托鉢僧とは、どんな人なのかが、うたわれています。

私もかつて、托鉢行をしましたが、それは、下座行と言われ、人さまの家の門に立ち、お祈りをして（私の場合は、般若心経一巻をあげさせていただきました）、他者の幸福を祈る行です。それによって、お布施を頂ける場合もありますし、頂けない場合もあります。もともと、托鉢は、頂くことだけが目的ではありません。それは、僧侶が為す一つの「法施」として行っているわけです。ですから、本当は、頂けるもよし、頂けないもよし、なのです。

さて、偈ですが、托鉢僧は「汚らわしい行ない」をせず、「福楽と罪悪を捨て」、「清らかな行ないを修め」「よく思慮して世に処している」人、ということです。

汚らわしくなく、清らかな行ないとは、すぐ前の偈で取り上げました、たとえば、十善戒を守ることです。

戒律を守ることは、口で言うのはやさしいのですが、実際に行うことはかなり難しいことです。たとえば、在家も守るべき最低の戒律として五戒があります。それは、前の四つは十善戒と同じで、①不殺生、②不偸盗、③不邪淫、④不妄語ですが、最後が⑤不飲酒となっています。なお、①の不殺生戒には、無暴力も含まれています。現在では、僧侶も含めて、ほとんどの人がこれを守ることに価値があるとすら考えていないように思われます。

子どもたちの暴力傾向はとても強いですし、万引きは蔓延しています。一般的に男女関係は乱れに乱れていますし、嘘をどれほど堂々と言えるかが、政治家の必須条件のようになっています。また、不飲酒戒は、大人では戒律にはなっていませんが、車に乗るときは禁止されています。それが、どれほど守れないかは、高知県が極めて厳しい罰則をもうけたことでも分かります。

最後に、「福楽を捨てる」ということですが、福は物質的な幸せで、楽は身体的・精神的な幸せです。解脱に至っていない修行の身では、こうしたものに気を煩わすことなく、ひたすら修行に励まなければならないのです。

そうでなければ、ただの乞食になってしまうのです。

後記

一、明けまして、おめでとうございます。

二、早々に年賀のご挨拶状を頂きました方々に誌面を借りて、お礼申し上げます。どなた様にも、こちらからは、賀状を失礼いたしております。お許しください。

三、正月らしく寒波がやってきました。風邪にお気をつけください。

四、年末に、昨年三月に植えつけたサトウキビの収穫をしました。とても良くできていたのですが、台風がきてほとんどが倒れてしまいました。収量について少し心配しましたが、約一アール（一畝）植えて、七六五kgとれました。よくとれたほうだとのことです。今年も、経験のため植えたいと思っています。でも、収穫には、不慣れなこともあって、手伝ってもらいましたが、一人に直せば十日間ぐらいかかったと思います。とても疲れ、大変でした。

五、十二月号で、一ゼミ生の修士論文の結果を紹介しましたが、他に修士論文と卒業論文を書いている学生が一人ずついます。二人とも別々に、障害児・者に対する人々の「態度」を調べています。その結果には当然、共通した点が多いのですが、その一つとして興味を引くのは学部学生の態度です。二人とも、いろいろな集団からデータを採っていますが、どちらの結果でも、学部の学生が障害児・者に対して、もっとも差別的・偏見的で、非好意的だという点です。

六、私も授業を通じて、最近の学部学生や学部卒業後すぐ修士課程に進学してきた学生の、他者に対する感受性が、きわめて悪いと感じていました。その実感と、この結果とは、ピッタリと符合するものです。いま、若者が自己に閉じ、他者にこころを開かなくなっているようです。私の授業は、「自分自身を知る」ようになることを一つの目的にしていて、毎時間、授業の感想（内省）を書かせますが、それが、とてもお粗末になっています。

月刊　こころのとも　第十巻　一月号（通巻一〇九号）

平成十一年一月八日
〒772―8502
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号01610―8―38660